「先生、これって大変じゃありませんか？」

昨日、あるお家の方と電話で話す機会がありました。

最近は、コスモスハーモニーの紙面上でのメッセージのやり取りができたり、直接お会いしてお食事やお茶をする機会があったり、こうやって電話やお手紙などでも交流できる機会が増えてきて、大変ありがたく思っています。

伴走者同士のつながりが増えていくことは、以前にも書いた通り、子どもたちの豊かな学びを後押しすることにつながっていきます。

さて、昨日のそのお電話の中で、ふと「通知表」の話題になった場面がありました。

SOLAN 小学校では、「まなポート」というソフトを使って、毎月学習評価を行う仕組みで現在は運用されています。

その「毎月」という頻度に、そのお家の方は大変驚かれていました。

今までに教職のご経験があるそうで、通常の公立学校ならば年に 1 度か 2 度の評価が行われているところを、SOLAN では毎月行われていることが信じられないとおっしゃっていました。

「私も経験があるので分かるんですけど、評価をすることってものすごく大変ですよね。年に 2 回とかでも大変なのに、それを毎月しているって先生方がどれほど大変なんだろうと思ったんです。毎月じゃなくて、クォーターに 1 回とかでもいいんじゃないですか？」

との声を聴かせてもらいました。

こうやって、我々の仕事の見えないところまで心を割いてくださる気持ちがまずとても嬉しかったです。

私も、この学校に来てから毎月の評価を行う仕組みに驚いた一人です。

通常、公立学校では３学期制ならば３回、２学期制ならば２回の通知表が学期ごとに発行されているところがほとんどです。

ほとんど、と書いたのは、発行していない学校も存在するからです。

そもそも、通知表というものは発行義務があるものではありません。

私が以前勤務していた公立校では、その通知表も柔軟に運用ができるように改革を実現し、まず２回の発行頻度が１回になりました。

さらに、「所見」といって、「～～の学習で頑張っていました」のような文章での評価についても、「個人懇談」にまとめる形で年 1 回にすることができました。

短い文章で日頃の様子を伝えるより、口頭で相手の表情を見ながら日頃の様子を伝えた方がより正確に伝わると思ったからです。

先のお家の方からの電話に会った通り、評価というものは非常に大変な作業です。それを、2 回から 1 回にしたり、テキストでの所見を口頭での懇談に代替することで、先生方が授業の準備をしたり、教材研究をしたりする時間を豊かに創り出すことができました。（保護者の方々からも好評でした）

つまり、公立学校でも、この通知表を含めた「評価」に関する業務をどのようにしていくかということは、目下の懸案事項だということです。

SOLAN でも、お家の方の声が持つ影響力はとても大きいので、先のお電話のように「もっとこうしてもいいんじゃないかしら」というのがあれば、またぜひ教えて貰えると嬉しいです。

より良い学校を創っていくためのご意見・ご協力、お待ちしております。

昨日のお電話には、私は救われる思いがするとともに大変勇気づけられる思いがしました。ありがとうございました。

また、本日授業参観に来られたお父さんからも、学年通信に向けてご感想をいただきました。

特に「失敗」に関して書いた号（←クリックで開きます）に感動したとの声を聞かせてもらい、こちらも大いに励まされる思いがしました。

毎日誰かに少しでも届けばいいなぁという思いで書いている学年通信ですが、私など単純明快な人間なので、先のお父さんのようなコメントを聞かせてもらうだけで天にも昇る思いになります。

ちょうど、「失敗」に関してふと思い出した話があるので、以下に紹介します。

「サーカスの象は、なぜ逃げないか知っていますか？」

いきなり、このように問うてみたとします。

恐らく子どもたちはキョトンとするでしょう。

象は、陸上生物の中で最大の生き物。

力の強さも、動物の中で最強です。

その気になれば大木を根こそぎ引っこ抜くほどの力を持っており、百獣の王であるライオンでさえ敵わないと多くの動物学者が言われています。

しかし、サーカスにいる象は、普段、小さな杭につながれた鎖を足に巻かれているだけであるにもかかわらず、決して逃げようとしません。

これは、有名な「鎖につながれた象」というお話です。

少し長くなりますが、ある本から引用します。

お祭りの時期にやってくるサーカスを、毎年楽しみにしていたとある男の子。特に、巨大な身体を揺らしながら曲芸をこなしたり、愛嬌のある表情で長い鼻を伸ばす象の演技が一番のお気に入りだった。

しかしその年、その男の子はテントの売れでちっぽけな杭につながれた象の姿をみて「その巨体ならどうにでもなるはずなのに」と、なぜか逃げ出さないことが不思議でたまらなかった。父さんや母さん、お隣のおじさんや周りの大人たちに聞いてみても、そのわけを答えられなかった。

　そんなある日、たまたま男の子のいる町にやってきた賢人（けんじん）に出逢った。男の子は他の大人に投げかけていたのと同じように象の質問をしてみた。そうすると、その賢人は男の子の顔をのぞきながら、こう答えた。

「サーカスの象が逃げないのは、生まれたばかりの小さな小象のときから杭につながれているからだよ」

その話を聞いた男の子は、生まれたばかりで弱弱しい象が杭につながれているところを想像してみた。生まれたばかりの小象は、自分の身体から生えている 4 本の脚が何のためにあるのか知るために、走りだそうとしてみる。しかし杭につながれた鎖が邪魔をして、その場から大して動くことはできない。薄暗い部屋からわずかにのぞく外の世界を見てみようと顔を伸ばしてみても、やはり脚の鎖がやっかいだ。

そうして、押したり、引いたり、懸命になって逃げようとしたに違いない。

しかし、どんなにがんばっても、その鎖から逃げることはできなかった。

小象にとって、その杭はあまりに大きすぎたのだ。

疲れ切っては眠りにつき、また次の日も同じことを繰り返す。

そんなことを繰り返している内、遂にある日、象は逃げることをやめた。

脚についた鎖と杭は、こういうものだと理解した。

そう。これこそが、象が逃げない理由だった。

このサーカスに登場する象は、いまやどれだけ身体が大きくなったとしても、杭がちっぽけであったとしても、

「できない」と思い込んでいるから逃げないのだ。

この鎖は、心の鎖とも言い換えられます。

自分で自分のことを「できない」と思い込む心のクサリ。

できないと思い込むから、チャレンジしない。

チャレンジしないから、永遠にできるようにならない。

そんな負のスパイラルの原因ともいえる「鎖」は、心のどこかにかかってはいないでしょうか。

私にとって言えば、少年期の鎖はまさに「音楽」でした。
小学一年生のころ。
鍵盤ハーモニカが上手に吹けず、楽譜も全然読めなかった私は、一番嫌いな教科が「音楽」でした。
以来、音楽は苦手と決めつけていました。
そうやって敬遠するからますます苦手になり、中学校 3 年生になっても楽譜すらまるで読めませんでした。
だから、高校一年生の春、先輩にバイオリンを弾かないかと誘われたときは、「冗談じゃない」と思いました。
ただ、先輩の言うことに一年生がいきなりあらがえるはずもありません。
「部活、決まってないんだったら、一回だけでも見においで。」
そう言われ、渋々部室に出かけて行ったのが始まりでした。
一度だけの見学のつもりだったのが仮入部届を書かされ、仮入部届のはずだったのがいつの間にか本入部扱いになっていて・・・。その後は・・・
1 年生の子たちにはとうにばれてしまっていると思いますが、現在のような楽器大好き人間が出来上がりました。
バイオリンだけでなく、三線やギター、ベースなど、いろんな楽器に親しむようにもなりました。
いろいろと思うところはありますが、一つだけ確かに言えことがあります。
それは、自分が音楽を苦手と思っていたのは、ただの思い込みに過ぎなかったということです。
そんな自分の鎖を抜いてくれた経験の証（あかし）が、楽譜です。
だから私の宝物というわけです。
今でもバイオリンを弾くたびに、行動すること、チャレンジすることのす

ばらしさを心と体で思い出しています。

自分の成長に強烈にブレーキをかける心のクサリがもしあるとするなら、一つ一つ抜いていけたらいいなぁと思っています。

「できない」「苦手」なんてことを簡単に思い込み、自分のチャンスを狭めてしまうのは、あまりにもったいないことだからです。

先日の「成功と失敗」について書いた通信でも述べましたが、「できない」と勘違いし、「失敗は恥ずかしいこと」と誤解するようになると、人は行動を起こさなくなります。

だからこそ、少しだけ先を生きている我々大人が、そうした勘違いなり誤解なりを解いてあげる必要があると思っているのです。

そのためには、「生きたエピソード」がいります。

お父さんやお母さんがこれまで通ってきた人生の中で、もし心のクサリを抜くことができたエピソードなどありましたら、ぜひ教えてください。

どこかの偉人のサクセスストーリーや、教科書に載っている美しい話よりも、身近なお父さんやお母さんが生きてきたストーリーは、何倍も子どもたちの心に届き、響くはずです。（渡辺道治）

（ご意見ご感想などいつでも気軽にお寄せください。お父さん、お母さんの、「クサリが抜けたエピソード」もお待ちしております。）

↓↓↓

1学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ (google.com)